

ニヒドロキシステアリン酸の植物に對する作用に就て（第二報）並にニニ高級脂肪酸の作用に就て

助 教 授 藤 瀬 四 郎

第一報の成績に依ればニヒドロキシステアリン酸は大麥及水稻に對しては豫想以上多量に土壤中に存在せざれば著明の害作用なく、従つてこのもの即ち油酸系の脂肪酸より誘導せらるゝ單なるオキシ酸を栽培上特殊の毒物として考ふるの適當ならざるを知ると同時に該酸以外の類似の有機酸の害作用は如何なる可きかを知るは該酸の有害作用の吟味の上は元より我國の如く含油有機質肥料を多量に用ゆる所にては肥料分解中に生ずる高級脂肪酸類の植生に對する關係を知るは極めて重要な可きを以てニヒドロキシステアリン酸の外に油酸、バルミチン酸、ステアリン酸、及乳酸をも用ひて大麥に對する作用を試験せり。

試験の方法 植木鉢栽培に依る。即ち小型ポット（第一報のものと同一）に當地附近に廣く分布するシラス（浮石質細土）の徑四粋の篩を通れるものに所定の濃度に酸を添加し各々に一九〇〇瓦（風乾）宛を入れ之れに一立中に硝酸石灰一・〇瓦、硫酸苦土〇・四瓦、鹽化加里〇・一瓦磷酸加里〇・三瓦を含む。養液五〇〇厘宛を注加し更に井水にて補ひ適度の潤ひとなし硝子

室内にて培養す。(大正十四年)

供試植物 大麥、品種 魁

均一なる種子を選び硝子室内にて七日間時々水を換へつゝ浸漬し幼根少しく出たるもの
を一月三十日に七粒宛供試土壌に下種し二月二日土表に出芽する迄被覆をなす。二月六日
葉長三糱内外となりたる時に生育一様のものゝ三本を残して他は除去す。二月二日頃の出
芽の有様は各區共に遅速の差なく均等に出芽せるも只乳酸の高濃度區のもの出芽少しく遅
れたり。

試料 試験に用ひたる酸は次の如くして得たり。

一、ニヒドロキシステアリン酸 第一報の實驗に使用せるものと同品にして油酸を酸化
して得たる純品。

二、バルミチン酸 晒和蠟を鹼化し硫酸にて析出せしめたる遊離酸を集め九五%酒精にて
五回處理し更にエーテルにて再結晶せしめしものにして、このものゝ定數は次の如し。

融 点 六二・〇度

酸 數 二一八・五九 分子量 二五六・六四(計算數二五六・一六)

三、ステアリン酸 硬化油を鹼化し硫酸にて析出せしめたる遊離酸を集め九五%酒精にて
處理すること六回にして析出部をエーテルより再結晶せるものにして光輝ある鱗片狀結
晶にして次の如き定數を有す。

融 点 六九・〇度

酸 数 一九六・九一 分子量 二八四・九〇 (計算數二八四・一九)

四、油 酸 椿油を鹼化し之れを鉛石鹼となしエーテルにて可溶部を集め硫化水素にて分解しエーテルを去り再び鉛鹽となしエーテルにて溶出し硫化水素にて遊離酸となし水洗しエーテルを去り寒剤にて冷却し結晶せしめ冷室にて炭酸瓦斯を通じつゝ粘土板に塗り結晶を集めたるものにして室温にては透明油状のものにして次の如き定數を有す。

沃度數 (ウイース氏)

八九・一 (理論數九〇〇七)

酸 數 一九八・九四

分子量 二八一・九九 (計算數二八二・二七)

五、乳 酸、メルク製純品

六、ニヒドロキシステアリン酸曹達

ニヒドロキシステアリン酸を温酒精に溶かし計算量の苛性曹達液を以て中和し温めて酒精を去り膠状のものを乾涸し粉末となす。

試験區の種類及び試料の濃度

試験區名	番號
ニヒドロキシステアリン酸區	1
全 上 十炭酸石灰(當量)區	2
ニヒドロキシステアリン酸曹達區	3
バルミチン酸區	4
ス テ ア リ ン 酸 区	5
油 酸 區	6
乳 酸 區	7
(しな加添)準標	8
	9

試験の成績

(一) ニヒドロキシステアリン酸區

二月六日に各三本宛となし其後各一週目毎に生育調査をなせる結果は次表の如し。

草丈調査(梗)

				番號		月日					
				1	2	3	4	5	6	7	8
二月十三日 (第一週目)	平均			三、二	三、九	四、一	五、一	六、三	六、一	五、七	四、二
二月二十日 (第二週目)	平均			三、七	四、〇	五、〇	五、〇	六、〇	六、〇	五、〇	四、〇
二月二十七日 (第三週目)	平均			四、四	四、四	五、五	五、五	六、〇	六、八	六、八	五、六
二月	四、二	四、二	四、二	四、五	四、四	四、五	四、九	六、〇	六、五	六、三	七、一
五、二	六、一	四、九	四、五	六、二	六、二	五、八	四、八	九、一	一〇、一	一〇、二	一〇、〇
六、三	六、六	六、六	五、八	五、六	五、六	一〇、一	一〇、一	一〇、九	一〇、九	一〇、〇	九、八
四、三	五、〇	四、三	三、七	九、三	九、三	一〇、一	一〇、一	一〇、九	一〇、九	一〇、〇	九、八
五、六	六、三	五、八	四、六	一一、一	一一、一	一一、〇	一一、〇	一一、二	一一、一	一一、〇	一〇、一
五、七	六、七	五、六	四、八	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、一	一一、一	一一、〇	一〇、一
五、五	六、二	五、八	四、七	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、一	一一、一	一一、〇	一〇、一
七、一	九、三	六、七	五、八	一一、一	一一、一	一一、〇	一一、〇	一一、一	一一、一	一一、〇	一〇、一
七、三	九、三	四、二	四、一	九、七	九、七	九、九	九、九	九、八	九、八	九、七	九、六

三月六日 (第四週目)		三月十三日 (第五週目)		三月二十日 (第六週目)	
平均	四・四	五・三	一〇・八	一六・一	一八・九
六・八	六・二	九・八	一〇・八	一八・二	二〇・〇
七・〇	七・一	三・五	一七・五	一八・五	二〇・一
九・〇	一五・一	一四・三	一九・二	一八・九	一八・〇
一〇・〇	一〇・〇	一九・五	二〇・三	三・〇	一九・五
一八・九	一四・三	一八・九	一八・八	三・〇	一〇・五
一九・〇	一九・一	一九・〇	一九・五	一〇・二	一〇・五
一九・七	一九・七	一九・〇	一九・七	一〇・七	一〇・七
二一・三	二一・三	一九・〇	一九・一	一〇・〇	一九・一

生育中は五百分の一區は殆んど生長をなさず後期に至り酸の分解の結果、狀況の好變のため徐々に伸長をなすに過ぎず即ち生育を全く阻止すと云ふを穩當とする。千分の一區は生育不良にして葉色も帶黃にて害著しきを見る。五千分の一は生育稍不良にして葉色少しく帶黃なり。即ち害著しきを見る。一万分の一區以下は生育殆んど標準と異ならず。

第五週目頃より氣候溫暖となり酸の分解速かなりしたためか被害區が急に生長を挽回する

状を呈せるを以て第六週目を以て試験を中止し撮影をなし(第一圖)植物体の乾量を秤りたるに次表の如き結果を得たり。(單位瓦、以下同じ)

乾物番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9
地 上 部	0.四五七	0.九四一	一.八三三	二.四六八	三.三八九	二.九九八	二.九一八	四.一二六四	二.七六七
根 部	0.三五六二	0.六六〇九	一.三四九	一.五四五	二.二七四三	一.八九二	一.八九三	二.四三五〇	一.八六六
合 計	0.一七五八	一.八〇八〇	0.9101.三	0.400.四	五.六六三	四.八六九	四.八〇六	六.五六一四	四.六三三

上表に依れば一萬分の一を以てニヒドロキシステアリン酸及炭酸石灰添加區点と見るを至當とする。

(ii) ニヒドロキシステアリン酸及炭酸石灰添加區

草丈調査(粳)

二月十三日 (第一週目)									
月 日 番號									
平均									
四.七	四.八	五.〇	四.八	四.七	三.六	三.五	一	二	三
四.二	三.八	四.〇	三.七	三.六	三.五	一	二	三	四
三.九	三.八	四.〇	三.八	三.七	三.六	三.五	一	二	三
八.三	五.六	五.九	五.七	五.三	五.二	五.一	四	五	六
七.〇	六.七	七.三	七.一	六.一	五.九	五.七	四	五	六
九.九	六.三	六.四	六.二	六.一	五.九	五.七	四	五	六
一〇.七	六.四	七.九	六.二	六.一	五.八	五.六	四	五	六
九.四	六.七	六.九	六.七	六.六	五.三	五.一	四	五	六
九.六	六.二	六.七	六.七	六.六	五.三	五.一	四	五	六

二月二十日 (第二週目)		四、八	四、五	四、〇	九、七	二、二	一〇、〇	一〇、九	一〇、〇
	平均	四、八	四、六	四、四	九、三	一〇、〇	一〇、九	一〇、一	一〇、一
二月七日 (第三週目)		四、七	四、三	五、八	三、四	三、二	一五、七	一五、二	一五、五
	平均	四、八	四、五	五、九	四、五	六、八	一五、七	一六、五	一四、七
三月六日 (第四週目)		五、〇	五、〇	六、一	五、五	七、八	五、八	一七、〇	一七、二
	平均	四、八	四、六	五、九	四、五	五、九	五、七	一五、六	一五、八
三月十三日 (第五週目)		四、七	四、二	一〇、一	一六、二	一四、二	一九、二	一九、一	一八、二
	平均	五、〇	五、二	五、四	一一、三	一八、二	三、八	一〇、一	一九、四
三月二十日		五、七	七、六	一五、六	一九、一	一六、三	一〇、一	一九、二	一九、五
	平均	六、〇	九、五	一五、九	一一〇、五	一一〇、二	三、〇	一九、五	一〇、〇
		九、七	一〇、六	一八、〇	一一〇、九	三、八	三、五	一〇、七	一〇、八
	平均	七、一	九、二	一六、五	一一〇、三	一九、七	一〇、九	一九、八	一九、六
		一〇、〇	一四、七	一九、一	一一〇、一	一八、五	三、五	一〇、四	一九、五
	平均	一〇、〇	一四、七	一九、一	一一〇、一	一八、五	三、五	一〇、四	一九、五
		一一、〇	一九、三	二二、二	二二、五	二二、八	二二、五	二二、二	二二、五
	平均	一一、〇	一九、三	二二、二	二二、五	二二、八	二二、五	二二、二	二二、五

二ヒドロキシステアリン酸の植物に對する作用に就て 第二報 並に二三高級脂肪酸の作用に就て

(第六週目)

平均	一・五	一・四・五	一・九・九	三・三	二・四	三・二	三・五	三・七	三・四	一・九・九	二・六
----	-----	-------	-------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	-----

生育概況は(一)の場合と殆んど同一なり。只僅かに五百分の一濃度のものが末期の回復早さを少しく異にす、従つて單に炭酸石灰を混合添加するのみ乃至酸を石灰にて中和するのみにては其の除害の効を見得ざりしこと第一報と同一の結果となれり。第六週目に試験を中止し撮影をなし(第二圖)後植物体の乾物量を秤ること次の如し。

乾物 番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9
地 上 部	〇・五九〇三	〇・九一〇五	一・八二五三	二・四九七七	三・五九七二	三・二九五	三・五二二	三・一六四五	三・二八六
根 部	〇・三五九九	〇・六三五	一・一七七三	一・五〇八二	二・三三二九	二・一〇四八	二・四〇〇一	二・〇一六〇	一・九四一八
合 計	〇・九〇一〇	一・五〇三〇	三・〇〇九九	四・〇〇九九	五・九一九	五・三三三	五・九六一四	五・一八〇六	五・〇九〇六

(三) ニヒドロキシスチアリン酸曹達區

草丈調査(粳)

番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9
二月十三日 (第一週目)	四、八	四、二	四、一	三、二	四、五	六、一	六、六	六、七	六、二
	四、三	五、三	七、〇	六、八	七、八	七、三	七、二	七、一	六、七
	五、三	七、〇	六、八	七、六	七、二	七、一	六、七	六、六	六、五
	四、八	四、二	四、一	三、二	四、五	六、一	六、六	六、〇	六、四
	四、三	五、三	七、〇	六、八	七、六	七、二	七、一	六、七	六、六
	五、三	七、〇	六、八	七、六	七、二	七、一	六、七	六、六	六、五
	四、八	四、二	四、一	三、二	四、五	六、一	六、六	六、〇	六、四
	四、三	五、三	七、〇	六、八	七、六	七、二	七、一	六、七	六、六
	五、三	七、〇	六、八	七、六	七、二	七、一	六、七	六、六	六、五
	四、八	四、二	四、一	三、二	四、五	六、一	六、六	六、〇	六、四
	四、三	五、三	七、〇	六、八	七、六	七、二	七、一	六、七	六、六
	五、三	七、〇	六、八	七、六	七、二	七、一	六、七	六、六	六、五

	平均	四、四	三、七	五、五	六、八	六、四	六、八	六、九	0、4	六、四
二月二十日 (第二週目)	平均	四、五	三、六	五、五	九、八	10、九	一一、六	一一、一	0、11	九、一
二月二十七日 (第三週目)	平均	四、九	四、九	五、三	四、七	六、六	10、0	一一、二	一一、九	一、三、一
二月二十七日 (第三週目)	平均	四、六	三、六	四、九	八、六	10、2	一一、三	一一、三	一一、一	二、八
三月六日 (第四週目)	平均	四、九	四、七	九、二	一、四	一、四	一、四	一、四	0、71	三、三
三月六日 (第四週目)	平均	五、五	四、八	10、五	一、七	一、八	一、八	一、八	0、71	一、四
三月十三日 (第五週目)	平均	四、六	四、六	九、五	一、五	一、五	一、五	一、五	0、71	一、四
三月十三日 (第五週目)	平均	四、九	四、七	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	0、71	一、四
三月十三日 (第五週目)	平均	五、七	五、二	一、五	一、五	一、五	一、五	一、五	0、71	一、四
三月十三日 (第五週目)	平均	五、一	四、八	一、四	一、二	一、二	一、二	一、二	0、71	一、四
三月十三日 (第五週目)	平均	四、八	四、八	一、七	一、八	一、八	一、八	一、八	0、71	一、四
三月十三日 (第五週目)	平均	七、〇	七、〇	一、七	一、九	一、九	一、九	一、九	0、71	一、四
三月十三日 (第五週目)	平均	八、二	一、四	九、〇	二、一	二、一	二、一	二、一	0、71	一、四
三月十三日 (第五週目)	平均	六、七	一、九	五、五	一、九	一、九	一、九	一、九	0、71	一、四
	0.41	1.80	1.71	1.91	2.00	2.00	2.00	2.00	0.71	1.11

三月二十日 (第六週目)	平均	10.6	13.9	17.2	19.4	18.7	19.5	21.0	21.0
	二、四	12.4	14.2	18.9	19.5	19.0	21.5	23.0	23.0
	三、五	13.5	17.2	20.5	21.9	19.8	23.7	24.0	23.0
	四、六	14.2	18.0	21.5	23.2	20.7	23.4	24.0	23.0
	五、七	15.0	19.8	23.2	25.0	22.5	24.0	24.0	23.0
	六、八	16.0	20.5	24.0	25.8	23.2	24.0	24.0	23.0
	七、九	17.0	21.8	25.5	27.2	24.5	24.0	24.0	23.0
	八、十	18.0	23.5	27.0	28.8	26.0	25.0	25.0	24.0
	九、十一	19.0	25.2	29.5	31.2	28.0	26.0	26.0	25.0
	十、十一	20.0	27.0	31.5	33.2	30.0	28.0	28.0	27.0

生育概況は殆んど前二者と同様なり。又五百分の一區の末期に至りて稍生育回復の早さが如きは(二)の場合と同様なり。然れ共酸を初めより中和して存在せしめても大いしたる作用を減せざるが如し。(第三圖)

乾物番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9
地 上 部	0.五七五	0.八六四	二.五四〇	二.六三三	三.一九五	二.八七〇	二.九二九	三.五四七	二.五九三
根 部	0.二六〇五	0.五四八四	一.六四一〇	一.六七二	二.〇八五九	一.七四一〇	一.七六二八	一.七五八	一.四八八三
合 計	0.八四〇	1.七六六	四.一八一〇	四.二六四	五.一八〇〇	四.六一〇	四.六三七	五.二六三九	四.〇八三

(四) バルミチニン酸區

草丈調査(粳)

月日	番號
二月十三日	1
四、二	三、八
五、〇	三、九
六、〇	六、〇
七、五	六、八
六、一	五、七
六、二	六、一
七、三	六、八
六、七	六、〇
六、四	六、一

(第一週目)

四、五

五、五

六、三

七、八

六、七

六、五

七、二

六、五

平均

四、二

四、八

六、一

七、四

六、三

七、二

六、六

六、三

二月二十日

四、五

四、三

五、八

十、六

十、一

十、一

十、一

(第二週目)

四、八

五、二

六、一

十一、八

十、八

十、八

十、八

平均

四、七

四、九

六、一

十一、五

十、一

十、六

十、一

二月二十七日

四、五

四、三

六、一

十五、一

十五、二

十五、六

十五、三

(第三週目)

平均

四、八

五、二

六、三

十五、六

十五、五

十五、四

三月六日

四、五

四、八

九、五

十六、三

十八、三

十七、七

十八、〇

(第四週目)

四、九

五、九

一、一

一七、五

一九、五

一八、三

一九、一

平均

四、七

四、九

六、三

十五、七

十五、八

十五、七

十五、三

三月十三日

五、五

八、二

三、一

十六、七

十八、三

十七、七

十八、一

(第五週目)

六、〇

九、六

一、四、七

一八、二

一九、六

一〇、〇

一九、〇

	平均	五・三	九・〇	三・六	一七・六	一八・八	一八・九	一九・八	一八・四	一八・三
三月二十日 (第六週目)	平均	五・五	一・二・二	一五・〇	一八・〇	一九・〇	一七・九	二〇・〇	一八・六	一九・一
	六・七	七・〇	二・四	一七・二	一〇・八	一九・〇	一〇・五	二〇・五	一九・九	一九・五
	五・五	五・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五
	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五	一七・五
	二・一	二・一	二・一	二・一	二・一	二・一	二・一	二・一	二・一	二・一
	三・七	三・七	三・七	三・七	三・七	三・七	三・七	三・七	三・七	三・七
	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇
	一〇・四	一〇・四	一〇・四	一〇・四	一〇・四	一〇・四	一〇・四	一〇・四	一〇・四	一〇・四
	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇	一〇・〇
	一九・六	一九・六	一九・六	一九・六	一九・六	一九・六	一九・六	一九・六	一九・六	一九・六

バルミチニン酸も二ヒドロキシステアリン酸と殆んど同一の害作用を呈す、即ち五百分の一の濃度にては殆んど全く大麥の生長を阻止し、千分の一の濃度にては著しき害作用をなし五千分の一にては稍著しき害をなす。一万分の一にては殆んど害を認めず。故にこの濃度が害の臨界点なるが如し。第六週を以て試験を中止し撮影し(第四圖)乾物量を測定せり。

即ち、

乾物番番	1	2	3	4	5	6	7	8	9
地 上 部	〇・四〇五	〇・六九六	一・九一〇	二・七七七	三・五四九	二・五六九	三・〇七〇六	三・一七九九	二・八九九六
根 部	〇・二九二	〇・四七〇	一・三九五	一・七六〇	二・五四八	一・五三六	一・八三四	一・九七一	一・八三三
合 計	〇・七〇	一・一七六	三・三〇五	四・五四〇七	六・〇九六六	四・一〇二〇	四・九五〇	五・一五五〇	四・七三九

(五) ステアリン酸區

月日	番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9
二月十三日 (第一週目)		三、四	四、〇	四、二	六、二	四、〇	六、二	五、五	六、五	五、二
二月二十日 (第二週目)	平均	四、一	四、一	五、〇	六、五	六、三	六、九	六、四	六、六	五、五
二月二十七日 (第三週目)	平均	四、六	四、五	四、二	八、〇	七、三	九、六	一〇、〇	九、七	八、六
三月六日 (第四週目)	平均	四、三	四、五	四、五	五、三	六、一	九、三	九、七	一〇、二	一〇、五
	五、三	四、七	四、三	四、七	五、三	四、六	六、五	九、三	一〇、三	一〇、五
	四、七	四、五	四、五	四、七	八、七	九、四	九、四	一〇、四	一一、四	一二、四
	九、九	九、九	七、五	三、二	一、一	三、五	三、六	一、四、九	一、四、五	一、四、五
	一五、九	一七、一	一七、一	一六、七	二、八	一、九	一、九	一、四、五	一、四、六	一、四、六
	一七、五	一七、七	一七、六	一六、九	一、一	一、一	一、一	一、四、八	一、四、六	一、四、六
	一七、七	一七、三	一七、三	一七、六	一、一	一、一	一、一	一、四、八	一、四、六	一、四、六
	一七、八	一七、八	一七、七	一七、六	一、一	一、一	一、一	一、四、六	一、四、六	一、四、六

	平均	四・七	四・六	一・九	四・七	四・六	一・九	四・七	四・六	一・九	四・七	四・六	一・九
三月十三日 (第五週目)	五、五	五、五	五、五	一、三	一、三								
平均	五、六	五、六	五、五	一、三	一、三								
三月二十日 (第六週日)	六、〇	七、八	一、六、一	一、七、八	一、九、七	一、七、一	一、六、六	一、〇、八	一、八、三	一、六、八	一、九、七	一、九、七	一、九、七
平均	六、五	一〇、九	一、八、六	一、九、五	一、九、〇	一、八、〇	一、八、七	一、五、五	一、九、〇	一、八、八	一、六、九	一、〇、〇、三	一、〇、〇、三

ステアリン酸の害作用は前記二種の酸の其れと殆んど同一なり。即ち五百分の一にては大麥の生長を殆んど阻止し、千分の一にては著しき害をなし、五千分の一にて稍著しき害をなし、一萬分の一が害の臨界濃度なるが如し。第六週目に撮影をなし(第五圖)次で乾物量を秤りたるに次の如き成績を得たり。

(六) 油 酸 區

草丈調査(粳)

番號	月日	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		三、八	四、一	三、八	四、六	五、〇	六、二	六、七	五、五	六、四
	二月十三日 (第一週目)	四、一	四、二	四、五	五、二	六、二	六、五	七、〇	六、五	六、六
	二月二十日 (第二週目)	四、三	四、二	四、三	五、一	五、九	六、五	六、九	六、三	六、五
	二月二十七日 (第三週目)	四、一	四、二	四、五	七、二	八、六	九、〇	一〇、九	一一、八	一一、一
	平均	四、三	四、二	四、七	七、七	九、四	一、三	一、六	一、九	一、一
三月六日		四、〇	四、二	五、一	三、五	二、五	一、〇	一、九	一、二	一、一
	平均	四、六	四、二	五、六	三、六	二、六	一、二	一、五	一、四	一、七
	四、九	四、二	四、二	五、一	四、三	五、〇	三、五	三、四	二、六	二、七
	四、九	四、三	一〇、六	一六、二	一五、八	一四、五	一四、五	一五、三	一四、七	一四、四
	四、九	四、二	九、二	一六、二	一六、四	一四、五	一六、二	一六、四	一五、九	一七、五
	四、九	四、三	一〇、六	一六、四	一五、八	一四、五	一六、二	一六、四	一五、九	一八、二

ニヒドロキシステアリン酸の植物に對する作用に就て
就て 第二報 並に二三高級脂肪酸の作用に就て

(第四週目)

	五・一	四・五	二・六	一・六・九	一・六・六	一・七・二	一・八・六	一・七・七	一・八・七
平均	四・七	四・三	一〇・五	一六・五	一五・六	一六・八	一七・二	一六・七	一八・一
三月十三日									
(第五週目)									
平均	五・一	九・四	一九・〇	一〇・二	一九・〇	一七・九	一七・五	一六・八	一六・五
三月二十日									
(第六週目)									
平均	五・〇	一三・五	二・一	一八・一	一八・〇	一七・二	一七・四	一六・九	一八・四
三月二十一日									

油酸の害作用も上記三つの酸と殆んど同一なり。即ち五百分の一にては大麥の生長を阻止し、千分の一にて著明の害をなし、五千分の一にて稍著しき害作用をなす。臨界濃度は一万分の一なるが如し。(第六圖)

乾物番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9
地上部	〇・三五〇	〇・六五三	二・四五	二・六五	三・〇〇三	三・三三	三・五八六	二・九一四三	三・一四五
根部	〇・三七七	〇・四三三	一・五三六	一・六三三	一・八〇七	二・五五〇一	二・四二六	一・七六五	二・〇一八
合計	一・〇一七	一・〇九〇	三・六〇〇	四・八七〇	六・〇八〇	九・一〇〇	四・七〇〇	五・一七〇	五・一七〇

(七) 乳 酸 區
草 文 調 査 (粳)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
二月十三日 (第一週日)	二、三	三、五	四、六	四、八	五、〇	五、三	五、一	五、一	六、〇
二月二十日 (第二週日)	二、九	四、六	五、二	四、九	六、二	六、〇	六、二	五、五	六、三
二月二十七日 (第三週日)	二、六	四、〇	五、〇	四、九	六、三	五、九	五、四	六、三	
平均	二、六	四、七	五、〇	六、四	七、七	八、八	九、〇	九、〇	
二月 二十七日 (第三週日)	二、八	四、七	九、〇	一、六	一、五	三、三	三、二	三、二	
三月六日	三、五	三、九	三、〇	五、〇	九、九	二、二	一、〇	一、〇	
平均	三、五	五、三	六、〇	六、〇	一〇、二	三、一	三、八	一、五、二	
三月六日	六、〇	三、六	一、五、四	一、七、八	一、七、二	一、七、六	一、八、六	一、八、六	

二ヒドロキサンスアリノ酸の植物に對する作用
就て 第二報 並に二三高級脂肪酸の作用に就て

(第四週目)		平均	三・八	九・〇	五・〇	一六・七	二・〇	一八・四	二・〇	一八・三	一七・三
三月十三日 (第五週目)		平均	七・九	二・二	一七・〇	一八・四	六・六	一八・二	一九・六	一九・〇	一八・七
三月二十日 (第六週目)		平均	八・〇	二・二	一九・七	一八・五	九・五	一九・五	一九・六	一九・三	一八・七
			八・九	三・二	一九・七	一九・五	二・七	二・〇・五	二・〇・二	二・〇・〇	一〇・五
			八・三	三・三	一八・三	一八・八	一九・三	一九・四	一九・八	一〇・一	一八・七
			二・一	一五・〇	一八・五	一九・四	一七・〇	一九・七	三・〇	二・〇・八	一六・〇
			二・二	一六・〇	一九・五	一〇・一	一〇・一	一〇・三	三・八	三・六	一九・五
			二・五	一七・〇	一九・五	一〇・〇	三・二	三・七	三・〇	三・八	二・六
			一・二	一六・〇	一八・八	一〇・〇	一〇・九	三・六	一・一	一九・七	
			一・二	一六・〇	一八・八	一〇・〇	一〇・九	三・六	一・一	一九・七	

乳酸添加の高濃度の區は出芽以來生長殊に遲緩にして極度の害作用を被りたり。之れ多量の乳酸の存在に依る水素イオン濃度の大なるに基くものなる可し。而して五百分の一區は試験の末期に至るも著大の害を呈し千分の一區は初めは著しき害を呈せしも試験の末期には稍著しき程度の害を與へ五千分の一區は初期には少しく害を呈せしも中期より回復し末期に至りては反りて強勢となり葉巾廣くなり生長促進の効を認めたり。一萬分の一區も初期には極めて輕微の害を呈せしも後には反りて強勢となれり。其他の低濃度のものはムシロ生長促進の効を認められ著しく葉巾廣く強勢の生長をなさしめたり。要するに乳酸は

有機質肥料の土壤中にも分解する際には多くは生成せられるものにしてこのものも土壤を著しく酸性化する程度に存すれば植生を害す可きことを知る。然れ共土壤の良好なる状態にてこの酸の適量に存在することは著しく植生を促進することを知れり。(第七圖)

乾物	番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9
地 上 部	0.四七三	一、三五四	三、〇六五	二、六九〇	三、五八五	三、三七五	三、三三〇	二、三三八四	二、八五〇三	
根 部	0.一七六	0.八七六	二、〇三九	一、五五三	二、二六三	一、九九〇	一、九〇三	一、八九七	一、六六〇	
合 計	0.五五〇	二、三三九	五、一〇九六	四、三九〇三	五、八三三	五、二二五	五、一三三	四、二三六	四、五三三	

結論

以上記する本報及び第一報の實驗に依り次の事項を了解するを得たり。

一、二ヒドロキシステアリン酸は植物に對し特に著しき有害の物質にあらず。其の由來する母体及類似の脂肪酸と同様の作用をなす。

二、即ちボツト栽培の余が實行せる状況にては該酸は五百分の一の濃度にて大麥の生長を阻止し千分の一にて著しき害をなし、一万分の一以下の濃度にては害作用を呈せず。

三、該酸の害作用は大麥よりも水稻に於て少し。

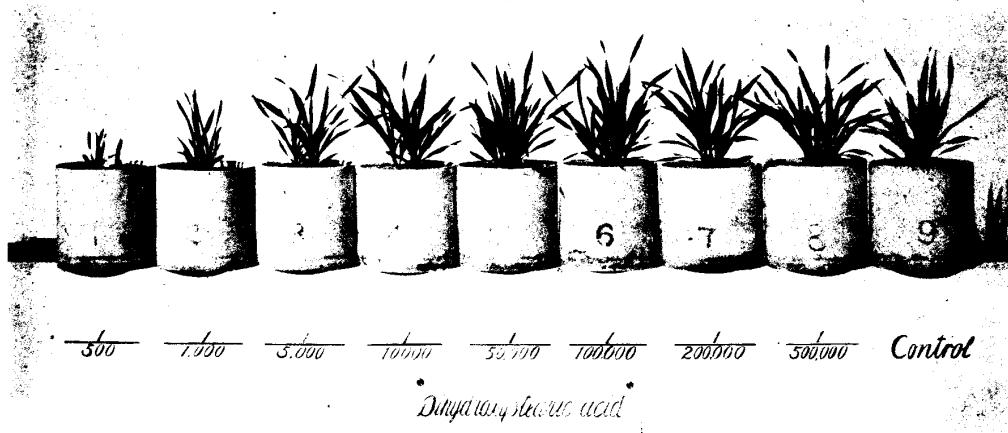
四、バルミチン酸、ステアリン酸、油酸等は二ヒドロキシステアリン酸と同様の害作用をなすことは我邦の如く含油有機質肥料を多量に施用する地にては充分考慮に値す可きものとす。

五、有機物の分解充分ならざる結果生産力劣りたる地にて微々として盛んならざる生育
状況にある植物は其處に存せし微量のニヒドロキシステアリン酸に依りて其れ相應の害作用を受く可し。斯く考ふるシュライナー氏及諸氏の研究は正しきものなり。然れ共若し其處に他のバルミチン酸、ステアリン酸、油酸の如き高級脂肪酸が存しても同一の害作用を呈す可し。(其れ等の酸の其後の變化の如何を問はざるとして)

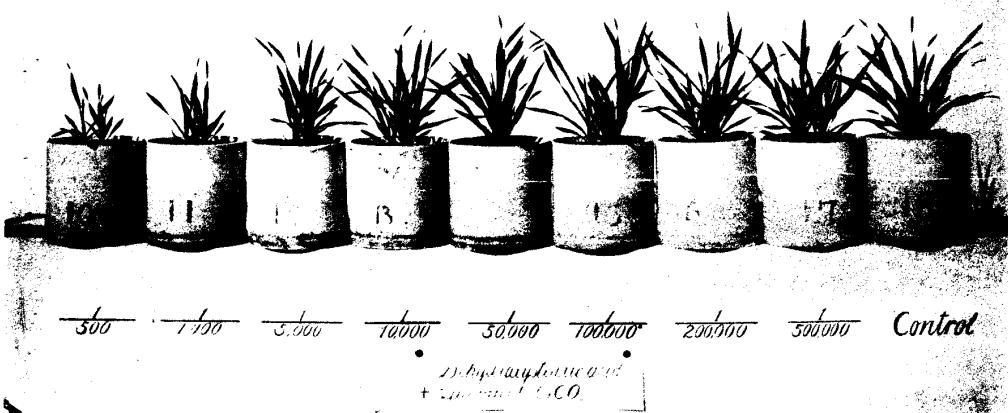
本實驗は恩師農學博士吉村清尙先生の御教示に依りて行ひたるものにして深く感謝の意

を表す。

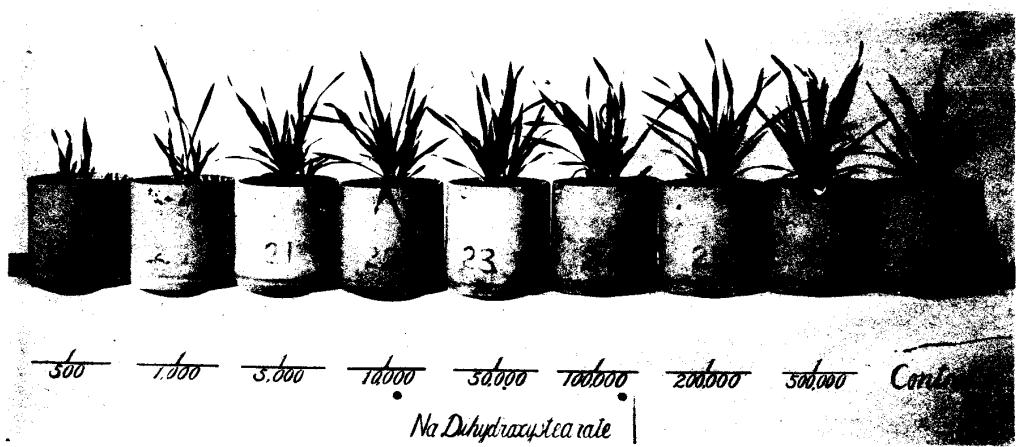
圖一 第



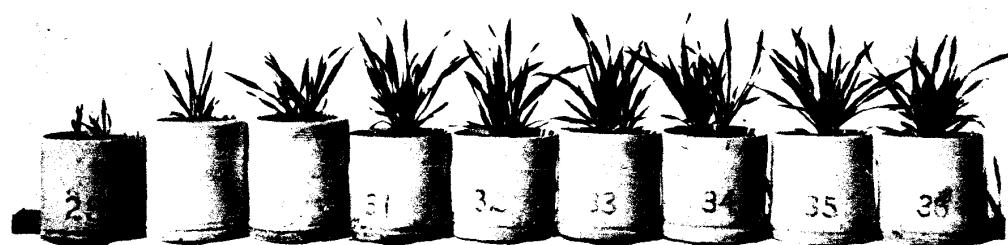
圖二 第



圖三 第

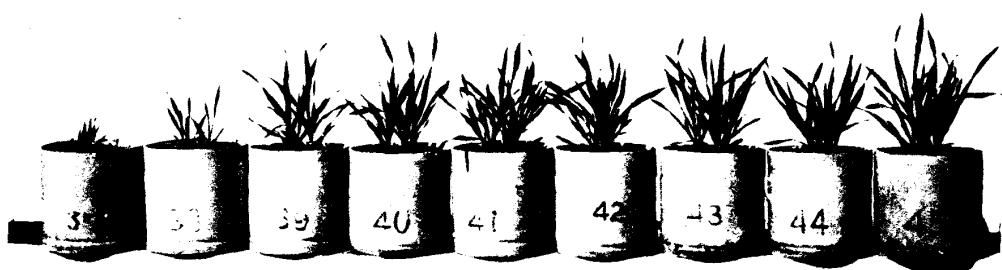


圖四第



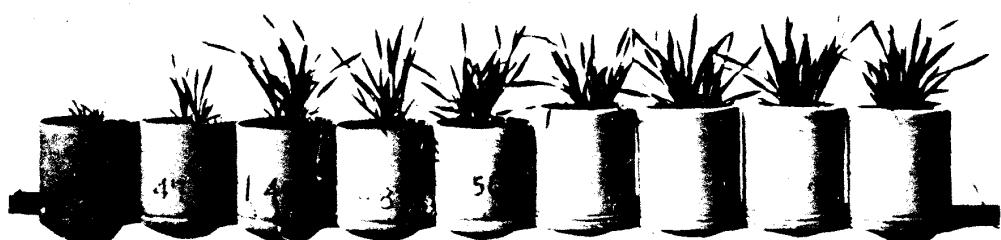
500 1,000 3,000 10,000 50,000 100,000 200,000 500,000 Control
Humic acid

圖五第



500 1,000 3,000 10,000 50,000 100,000 200,000 500,000 Control
Humic acid

圖六第



500 1,000 3,000 10,000 50,000 100,000 200,000 500,000 Control
Oligo acid

圖七第



500 1,000 3,000 10,000 50,000 100,000 200,000 500,000 Control
Oligo acid